

台湾アイデンティティの変化

歐 元韻

＜台湾の若者のアイデンティティ＞

早速ですが、台湾経済を語るうえで欠かせない問題が中国との関係です。現在、中国との関係は経済並び人的交流の面で年々活発化しており、その為、最近の若い世代を中心に改めて自分達のアイデンティティと将来に強く関心がもたれています。中国とは同じ中華圏の人間同士ですので、言葉の問題等もなく中国企業や学校に就職、入学する台湾の若者が増えています。元々は1990年代に加速した対中投資にて中国で働く台湾の人達が自身のアイデンティティを強く意識し始めたことがきっかけですが、今は1980年代以降に生まれた人達が台湾経済の変化と共にその意識にも変化が見られます。

＜タロイモ VS. サツマイモ＞

突然ですが、読者の皆さんは「タロイモ」と「サツマイモ」についてどのようなイメージを持たれていますか？多分、大半の方が思い浮かべるのは「食べ物」としてのイモ類だと思います。但し、台湾では食べ物以外にも別の意味を表す場合があります。この様な時、台湾の人達が「タロイモ」と聞いて思い浮かべるのは約1945年以降中国大陸から台湾に移り住んだ中国本土出身者（外省人）の事です。「サツマイモ」は数百年前から台湾に移り住んだ移住者（本省人）の事を指します。因みに、私の様に外省人の父と本省人の母をもつ人達についた俗称は「タロイモサツマイモ」です。この様に互いをイモ類に例えて表現することからもお分かりの様に過去両者の関係は決して良好とは言えませんでした。又、台湾には複数の原住民が暮らしており、その複雑多岐な民族構成は互いの存在を意識せざるを得ない環境でした。アイデンティティの複雑さということでは、日本植民地時代に日本教育を受けられた台湾の政治家で日本通の李登輝前総統は自身について「私は22歳までは日本人でした」との発言をされた件は大変有名な話です。

＜天下雑誌・2018年国家情勢調査＞

次のデータは台湾の経済専門誌「天下雑誌」が年に一回実施する「国家情勢調査」に於ける調査結果です。現在の台湾人におけるアイデンティティの変化とそれに伴った行動様式の変化を理解することができます。

【調査結果抜粋】

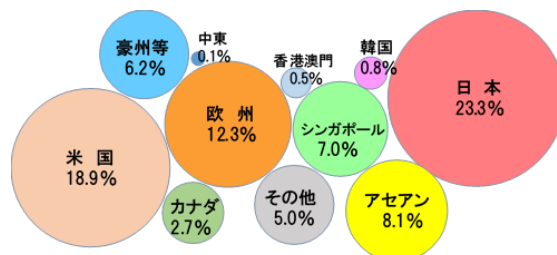
出所：天下雑誌・2018年国家情勢調査（天下雑誌股份有限公司）

- (1) 自身を「台湾人でもあり中国人でもある」と答えた人の割合はここ5年間で過去最高（34.1%）
- (2) 中国で働きたいと答えた台湾人の割合がここ5年間で過去最高（38%）

中国での就職について (%)

調査年度	興味なし	興味あり	無回答
2014	64.2	31.0	4.8
2015	66.3	29.4	4.3
2016	67.7	29.2	3.2
2017	66.9	29.5	3.5
2018	60.9	37.5	1.7

- (3) 海外で一番就職したい国は日本
日本：23.3% アメリカ 18.9%
ヨーロッパ 12.3% アセアン 8.1%



＜華人として活躍する台湾の若者＞

今までの台湾は常に諸外国とのビジネスに活路を見出す経済最優先の姿勢から、自ずとビジネスの分野においてもグローバル的視野に長けた優秀な人材を輩出してきましたが、これからは今までとは異なる新しい視点をもった「華人」としての台湾の人達が、中国、日本、東南アジア等の諸外国にて活躍の場を広げること確信しております。

